広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第55号　2006　331－337

子どもの対人葛藤場面における問題解決方略と社会的目標に関する研究の展望

郭　　穎

（2006年10月５日受理）

A review of studies on children's goals and strategies in response to conflicts

Guo Ying

This paper reviewed research about children's goals and strategies in response to conflicts. The issues of definitions, research methods, causes, and solution strategies of interpersonal conflicts were outlined. The focus of this review was the factors that would affect children's solution strategies. In addition to personal characteristics of children such as age and sex, various social-contextual factors such as intimacy of the children, the other's hostility, and the possession of target objects were described. Moreover, children's social goal associated with solution strategies toward conflicts were discussed.

Key word: children, interpersonal conflict, social problem solving, social goal
キーワード：子ども，対人葛藤，問題解決方略，社会的目標

はじめに

対人葛藤は，人間の発達に関する理論において重要な位置を占める概念である。子どもと仲間との間の葛藤にはしばしば攻撃などのネガティブな行動が伴うため，多くの教師や養育者はそれらの葛藤を「失敗した社会化の兆候」と見なしている（Shantz & Hobart, 1989）。一方，心理学者たちは仲間との葛藤経験が子どもの認知発達及び社会的発達にポジティブな影響を及ぼすと主張する（Shantz, 1987）。例えば，仲間との間の葛藤経験は，子どもの自己中心的な行動を減少させ（Piaget, 1966），社会的事象に関する理解能力を向上させ，言語能力を発展させると言われている（Dunn & Slomkowski, 1992）。また，対人葛藤経験は子どもにネガティブな行動を抑制したり，調整したりする機会を提供すると思われている（Katz, Kramer, & Gottman, 1992）。

このように仲間との葛藤は，子どもの社会的発達に大きな影響を及ぼすと考えられるため，これまで，子どもの間の葛藤に焦点を当てた研究が盛んに行われてきた。以下はまず，そのような子どもの葛藤研究の概観について述べていく。

１．対人葛藤の定義

子どもの葛藤研究は多面になされてきたが，主には親との葛藤，兄弟・姉妹との葛藤，仲間との葛藤という３つの研究分野にわけることができる。本稿では，子どもと仲間との二者の間の対人葛藤に関する研究に注目して論述する。

子どもの「対人葛藤」に関する従来の日本での研究においては，「トラブル」（本郷・杉山・玉井，1989；本郷・玉井・杉山，1992），「けんか」（朝生・木下・斉藤，1986），「いざこざ」（朝生・荻野・斉藤，1988；無藤，1992）など様々な用語で表現されているが，それぞれの定義は曖昧であった。

藤森（1989）や山本（1995a, 1999）及び深田（1998）は，対人葛藤を「個人の欲求・目標・期待が，他者によって妨害されていると個人が知覚するときに生じる対人的過程であり，感情・認知・行為を含むもの」と定義した。また Shantz and Shantz (1985) 及び中川・山崎（2003）では，対人葛藤は，「一方の子どもＡが

他方の子どもBに言語的,行動的に影響を与えるとき，Bが抵抗を，Aがその行動の維持を示すという，２者間の明らかな対立状態」として定義された。

さらに，小林（1998）は，他者との間で生じる対立を対人葛藤と呼ぶ。一方，Shantz（1987）は，ある子どもの目標が他の子どもに妨害された状況，あるいは，他の子どもの妨害に対して，子どもが自分の目標を達成しようとすることに固執する状況を葛藤場面であると定義している。

このように，対人葛藤の定義は，研究者のそれぞれの研究に応じてなされているため，今のところまだ，研究者間で明確な一致した見解が得られていない。

２．対人葛藤の研究方法

子どもを対象とした対人葛藤研究では，自然場面あるいは実験場面を観察する方法及び，紙芝居・人形を用いる面接調査や質問紙調査などの方法がとられている。その中で,自然場面観察の場合は,条件の統制（遊びの種類，遊具の数や状況，遊び集団の大きさ，文脈の違い）ができないこと，記録面の困難さ，データの数など解決しがたい問題が指摘されている。一方，実験場面を用いる場合，そこでの子どもの仲間集団中の対人葛藤過程は，自然場面での子どもの仲間集団中の対人葛藤過程と異なることが指摘されている（Genishi & Dipaolo, 1982）。しかし，子どもの仮想場面に対する反応と実際の行動は一致することを主張する研究もある（Chung & Asher, 1996）。また，仮想場面を用いる調査法による研究の中でも，仲間・親・教師の第三者による報告と子どもの自己報告という二つの種類の手法があるが，どちらの報告が客観的に子どもの対人葛藤の本質を反映するかについての議論は依然として続いている。さらに，仮想場面でなく，自分自身が経験した対人葛藤の自己報告による調査研究もある（Murphy & Eisenberg, 2002）。

３．対人葛藤の発生原因

多くの先行研究によれば，乳幼児期の子どもにおいては，物の所有をめぐるトラブルが対人葛藤の大部分を占めている（Brenner & Mueller, 1982；Bronson, 1975；Genishi & DiPaolo, 1982；木下・朝生・斉藤，1986；小林，1988）。また，Shantz（1987）は，相手からの脅迫や遊びにおける役割分担の拒否といった行動が，子どもの対人葛藤の発生原因の二番目の大きなカテゴリであると述べている。これに対して，子どもの成長とともに，「社会的状況」（social environment）をめぐる葛藤は，「物質的状況」（physical environment，例えば物やスペース）をめぐる葛藤を上回るようになる（Shantz & Shantz, 1985）。ここで，社会的状況には，意見・事実・信念も含んでいる。

山本（1996）は，異年齢集団遊びに発生する対人葛藤に注目し，自然観察法によって子どもの対人葛藤の発生原因を検討した。その結果，自分と相手との対人関係の違いによって対人葛藤の発生する原因が異なることを示した。具体的に，「物の取り合い」,「不快な働きかけ」,「ルール違反」,「遊びに関する意見のズレ」,「偶発」と分類された５つの原因の中で，対人葛藤を引き起こす幼児の年齢に関係なく，年下の幼児が自分より年上の幼児に対して対人葛藤状況を挑発する場合には，特に「ルール違反」によることが顕著に多く，次いで「物の取り合い」原因が多くみられた。このような結果の理由として，山本（1996）は，年下の子どもは単純に遊びのルールをよく理解していないか，あるいは自分がルール違反を行っても，多くは許してもらえたり，強い反発を受けず見逃してもらえたりすることが多いと認知していると述べている。また，年中児（５歳）は年下に対して「遊びに関する意見のズレ」において自分の意思を多く通そうとしているが，年上に対してはこの傾向が見られなかった。これは，年中児は自分より年下の者には自分の意見を通しやすいと判断するが，言語的な問題解決方略などの社会的により有効な方略を獲得していると判断する同年齢や年上の者に対しては，自分の欲求が一方的に充足されにくく，また遊びに関する意見のズレが他と比較して少ないためであると考えられる。

以上のことをまとめると，幼児期から就学前期にかけて，仲間との相互作用における葛藤の特徴が変化する。乳幼児期に葛藤は物の所有が原因となることが多いのに対して，就学前期になると，意見のズレによる葛藤が増加する。また，当事者の年齢の差異によって対人葛藤の発生原因も異なる。

４．対人葛藤の終結：問題解決方略

対人葛藤の当事者は，お互いに自分に有利になるよう葛藤を解決したいと考え,相手に対して働きかける。葛藤の解決に向けての働きかけは，解決方略と呼ばれる（深田，1998）。社会的問題解決方略の獲得が子どもの社会的発達において重要な位置を占めているため,それに関する研究が盛んに行われている。概して，自由遊び場面においても，実験場面においても，子どもは仲間との葛藤状況において行動的方略と言語的方略を両方用いることが分かっている。また，身体的攻

撃方略より，言語的方略のほうがはるかに頻繁に使用されることが示されている（Eisenberg & Garvey, 1981）。以下では，子どもの対人葛藤において，問題解決方略の選択に関連する要因を取り上げる。なお，年齢や性別要因を取り扱った研究の中で，その２つの要因と他の要因との交互作用効果がみられたものは，別項で記述しない。

１）物の所有の優先性の影響

Bakeman and Brownlee（1982）は，物をめぐる対人葛藤が生じる際に子どもが用いる解決方略を研究した。彼らは，未就園児やより年少の幼児を観察し，元の所有者が取り合いでは争いに勝つことが多く，「先に所有していること」が子ども同士の暗黙のルールとして機能していることを見出した。

一方，子安・鈴木（2002）は，子どもに「被験児が使っていた遊び道具を他の子どもに持ち去られる場面」という対人葛藤場面を提示し，反応を選択させた。その結果，年中児（５歳児）では自己抑制的反応が多いが，年長児（６歳児）では自己主張的反応が多かった。ゆえに，年長児となると，より豊かな社会的経験をもつようになり，自分に有利な状況と判断すれば，葛藤状況の終結のために，自己主張方略を使用しやすいといえる。

２）当事者の親密性及び既知性の影響

対人葛藤状況における当事者の対人関係に焦点を当てた研究が多くなされている。浅川・飯田・永野（1990）は，幼児が３人で遊ぶ場面を設定して，おもちゃの共有，あるいは取り合いを観察したところ，女児の方が相手におもちゃを分け与えることが多く，また親しい友人の間では相互理解やルールによる解決が多く見られたという。

しかし，浅川他（1990）と異なる研究結果もある。山本（1995b）は，同年齢の友だちとのおもちゃを用いた遊びの中で物を巡る対人葛藤を用いて，仲間との親密性及び既知性が幼児の自己主張解決方略にどのように影響を及ぼすかを検討した。その結果，低親密児に比べて高親密児に対して，子どもは自己主張することが多く，相手のことをよく知っている子（高既知児）に対しては，仲良しではない子に比べて仲良しな子に対して自己主張が多く用いられた。これに関して，山本（1995b）は，対人関係が親密であるほど，また当事者たちがその関係に関与しているほど対人葛藤の生じる頻度が逆に高まると述べている。そして，親密な対人関係においても関心や意見の対立は避けられないという Coser（1956）の研究結果を取り上げ，幼児は対人関係が安定していると自覚したときに，自分の欲求や要求を明確に主張することができ，自己主張によって問題解決を行うことができると結論づけた。

また，倉持（1992）は，５歳児の物をめぐる対人葛藤場面を観察し，同じ遊び集団内にいた当事者同士が対立する場合と，遊び集団外の子どもと葛藤が生じた場合を比較し，葛藤の終結のために用いられる方略が異なっていることを見出した。もとから一緒に遊んでいた同一集団内の葛藤では，物を先に所有していたという「先取り」を主張する方略が多いのに対し，集団外の成員との間で生じた葛藤の場合は，相手側に少しの間，あるいは一つのおもちゃだけを貸してほしいと要求する「限定」，「条件」などの方略が使用された。

さらに，Hartup, Laursen, Stewart and Eastenson（1988）は，葛藤の持続・終結と当事者の親密さに注目し，自由遊び場面で生じた幼児の対人葛藤を観察し，次のように報告している。すなわち，親しい友人同士の間で生じる葛藤の場合には，比較的短いやり取りで終結し妥協が生じる。しかし，相手が友人でない場合には，やりとりが長く続き，その結果，勝者と敗者がはっきり分かれる傾向にあるという。

また，近年，中川・山崎（2004）は，当事者同士の親密性を注目した研究を行っている。この実験研究は４歳児から６歳児を対象とし，仲間のおもちゃをとって葛藤を引き起こす側に注目して，対人葛藤の解決に有効な方略である謝罪行動と親密性との関連を検討した。この研究では，謝罪行動を二種類に分けた。すなわち，「先生が見ているので，先生に叱られたら嫌だから謝る」という「道具的謝罪」と，「お友だちのおもちゃをとって悪いことしたから謝る」という「真の謝罪」である。これに基づいて，年齢及び親密性が幼児の用いる謝罪に影響するかを検討したところ，４歳児では６歳児に比べて，親密性の高い相手に道具的謝罪を多く選択するのに対し，６歳児では，親密性の高い相手には真の謝罪を，低い相手には道具的謝罪を用いることがわかった。この結果は，６歳児になると，４歳児とは異なり，他者感情推論に基づいて被害者に対して罪悪感を認識することができ，被害者との親密性によって用いる謝罪を使い分けるようになることを意味する。

３）敵意の有無の影響

対人葛藤において，相手の敵意の有無が方略の選択に影響することがわかっている（山本，1999）。山本（1999）は，４歳から６歳の幼児を対象に，同年齢・同性の友だちとの間の対人葛藤が生じようとする状況を描いた図版を提示して問題解決方略を尋ね，相手の

敵意の有無と幼児の問題解決方略との関係を検討した。その結果，敵意あり場面では，５歳児は，問題解決する際に非言語的攻撃・報復方略や消極的方略よりも言語的主張方略を，６歳児でも他のすべての方略より社会的に有能な言語的主張方略を多く用いると答えた。しかし，敵意なし場面では，５歳児は，言語的主張方略に加えて逃避・回避または無視するという消極的方略が多いが，６歳児ではその他のすべての方略よりも消極的方略を多く用いると答えた。ここで特に注目すべき結果は，敵意なし条件において，６歳児が４・５歳児よりも逃避・回避・無視あるいは無反応という消極的方略を多く用いることである。この問題解決方略の変化は，子ども感情認知の発達，他者視点取得能力あるいは自己調整能力の発達に関連する（山本，1999）。

４）性別や仲間受容との関連

子どもは対人関係を維持するために葛藤に対する適切な処理能力が必要だと思われる。よって，発達心理学の研究者は幼児の葛藤場面における解決方略を重要な社会的スキルと見なす。この観点は，就学前児及び小学生の葛藤解決方略が子どもの仲間受容に関係するという研究結果に裏付けられている（Cillessen & Bellmore, 2002）。小学校高学年の子どもを対象とした自己報告による研究では，向社会的方略が仲間受容と正の相関があることが示されている（Chung & Asher, 1996）。また，仲間受容と葛藤解決方略の関係においては性差がみられる。すなわち，女子の場合には，敵意的方略が仲間受容と負の相関があるのに対して，男子の場合には大人への援助を求める方略が仲間受容と負の相関がある。このような葛藤解決方略と社会的地位における性差は，期待されている男女の社会的役割の差異と一致する（Cillessen & Bellmore, 2002）。

さらに，実際の葛藤場面と仮想の葛藤場面両方においても，女子は関係本位の方略をより選択し，男子は自己主張性の強い自己中心的方略をより選択するという結果が得られている（Chung & Asher, 1996; Miller, Danaher, & Forbes, 1986）。

以上のように，子どもの対人葛藤における問題解決方略に関する研究は，性別や場面による問題解決方略の変化を単に記述するのではなく，方略と社会的認知や社会的コンピテンスとの関連を検討する方向で展開している。

５．対人葛藤と社会的目標

上述のように，子どもの対人葛藤研究では，問題解決方略に影響する要因がいくつか取り上げられてきた。近年，社会的目標もその要因の一つと見なされ，検討が行われている（Renshaw & Asher, 1983; Chung & Asher, 1996）。

目標とは，人がある対象・状況を獲得・到達しようあるいは避けようとすることである。対人葛藤状況において，大人と同じように，子どもは意識的にあるいは無意識的にどのような目標を追求するのかを決めなければならない。また，多くの葛藤場面において人間は異なるタイプの目標を抱くのがわかっている（Chung & Asher, 1996）。それらの目標は人間を特定の行動へと導き，動機づけると考えられる（Emmons, 1996; Renshaw & Asher, 1983）。Dodge（1986）が提唱する有名な社会的情報処理モデルもこの観点を支持する。

社会的情報処理モデルによると，社会的情報処理過程は符号化，解釈，反応探索，反応決定，実行の５つのステップから構成されている。例えば，対人葛藤が起こった際に，子どもはまず適切な社会的手掛かりに選択的に注意を向け，知覚する。例えば，仲間の意図を知るには表情や行動に注目する。次に，子どもは手掛かりを過去経験の記憶と統合し，その意味を理解する。例えば，仲間が怖い顔をしていれば，敵意を持っていると理解する。第３のステップにおいて，子どもは多くの反応レパートリーの中から状況に適切な反応を，社会化の過程で獲得した一定のルール構造に従って探索する。そして，子どもは生成した反応各々の起こりうる結果を評価し，目標を達成する可能性を評価しなければならない。最後に，その葛藤場面の反応を選択し，行動に表出する。このモデルによれば，前述した先行研究の結果のように，相手の敵意の有無というような葛藤場面に対する解釈は，幼児の問題解決方略と関連するのと同様に，子どもの追求する社会的目標も問題解決方略の選択に影響すると考えられる。

実際，多くの研究によると，幼児が仲間との相互作用の中で不適応行動を見せるのは，必ずしも彼らが適切な行動に関する知識を持っていないからではなく，不適切な目標を持っているからであることが示唆されている（Renshaw & Asher, 1983）。これらのことから，幼児の社会的行動や仲間関係を理解するためには，社会的目標を吟味することも必要であると言える（Chung & Asher, 1996）。

仮想対人葛藤場面及び日常対人葛藤場面両方において，子どもの社会的目標は問題解決方略と有意な相関

があることが見いだされている（Erdley & Asher, 1996; Rose, & Asher, 1999）。例えば，Erdley and Asher（1996）は，「仲間（参加者と同性）に牛乳をこぼされた」という敵意がはっきりしないような曖昧な挑発葛藤場面を10個設定し，４年生と５年生（平均年齢９歳11か月）の子どもを対象にして調べたところ，向社会的方略や回避方略を選択する子どもは，攻撃方略を選択する子どもより，平穏に問題を解決しよう，またこれからも仲間と仲良くやっていきたいという関係目標を求めることが多いことがわかった。一方，他の子に比べて，攻撃方略を選択した子は，仲間に仕返しする，あるいは仲間を怒らせてやるというような目標を追求すると報告することが多かった。また，このような復讐目標は，仲間報告による方略査定を行った研究においても，子どもの攻撃方略と関連することが示唆されている（Chung & Asher, 1996）。

仲間を相手とする曖昧な挑発葛藤場面において，復讐目標を追及する子どもは，攻撃方略を用いやすいと見られるが，親密さの高い友だちを相手とする挑発でない場面の場合，結果はどうなるであろうか。それに関して，Rose and Asher（1999）は，子どもと友だちとの仮想葛藤場面を30個設定し，小学校４・５年生を対象として，目標と方略の関係及びこの両者が友だち関係の質に及ぼす影響について検討した。対人葛藤場面は，例えば，「放課後，あなたが図書室で自分の宿題をしていると，あなたの友だちがやってきて，宿題を手伝ってほしいと言った。あなたはその友だちに自分の宿題をやりたいと言ったが，それでも，その友だちは，あなたに手伝ってほしいと求める」といった場面である。

その結果，まず，社会的目標における性差が見られた。女子は関係維持目標をより強く求めるが，男子は手段的コントロール目標をより強く求める。また，問題解決方略における性差は，葛藤設定の異なっている先行研究と同様であり，女子は男子より順応・妥協方略を選択し，男子は女子より自己利益主張方略を選択する。また，先行研究と同様に，社会的目標と問題解決方略との間に相関がみられた。関係維持目標は，順応・妥協方略と有意な正の相関が，自己利益主張方略や敵意方略と有意な負の相関があった。それに対して，手段的コントロール目標や復讐目標は，順応・妥協方略と有意な負の相関があり，自己利益主張方略や敵意方略と有意な正の相関があった。さらに，方略・目標が友だち関係の質に及ぼす影響に関して，復讐目標や敵意的方略は，ポジティブな友人関係に負の影響を与えることが示唆された。

以上の仮想葛藤場面による調査研究以外に，子ども自身の経験を調査した研究もある。Murphy and Eisenberg（2002）は，７歳から11歳の子どもに，自分と仲間の間に生じた最近の葛藤経験をインタビューして，対人葛藤における情緒・目標・行動の相互関係を調べた。目標と情緒の関連に関して，好意の目標は，弱い怒り・高い悲しみと相互関係があることがわかった。また，対人葛藤状況における方略と情緒の相互関係に関して，強制・威圧・攻撃といったような解決方略を使用したと報告した子どもは，怒り感情を持ちやすく，非好意的目標を追求する傾向が強いことがわかった。さらに，目標と方略の関連について，子どもの好意的目標から柔軟な行動を予測することができた。この研究で用いられた子ども自身の葛藤経験の報告は，新しい調査方法として，子どもの葛藤研究に有意義な貢献をしている。

以上の研究から，子どもの仲間受容や社会的スキルなどの対人問題を理解するためには，問題解決方略のみならず，社会的目標も，注目すべき側面であると言える。

今後の研究の課題

本論文では，仲間との二者間の対人葛藤場面における子どもの問題解決方略と社会的目標について展望してきた。以下，対人葛藤に関する研究の今後の課題について述べる。

研究者による対人葛藤の定義は曖昧で一致しないが，いずれの定義にも「対立」というキーワードが含まれている。生活の中で，一旦「対立」が生じると，目標が変わらない限り，一回の行動で終わることはまれである。多くの場合，一回目の対立によって，当事者間のやりとりが起こり，相手に要求したりされたりしているうちに，二回目，三回目の「対立」が新たに起こる可能性が高い。しかも，そのやりとりの過程は決して長くない。これまでの子どもの対人葛藤の定義によると，対人葛藤は，「一回目」の対立であると思われるが，特に仮想場面による調査研究の場合に，子どもが報告した解決方略や社会的目標は，第一反応または第一認識であるかどうか不明である。そのため，対人葛藤の定義をさらに明確する必要があろう。また，対人葛藤が生じたときから終結までの間に，子どもは短時間に何回も大量な情報を処理し反応するため，対人葛藤の当事者双方の一連のやりとりに基づいて，子どもの社会的認知・社会的行動を検討することも必要であると考えられる。

また，これまでの子どもの仲間葛藤研究は，葛藤状況がさまざまであって，葛藤を引き起こす側の敵意が

あるかどうかなどの状況要因や，仲間との親密さの対人要因を取り上げて問題解決方略あるいは社会的目標を検討してきた。しかし，対人葛藤場面は多くの情報が含まれているため，個人要因のほか，さまざまな社会的文脈要素が，葛藤に対する行動や認知に影響を及ぼすと予測される。よって，対人葛藤の発生空間，発生原因，第三者の存在などの状況要因，また当事者双方の社会的地位・相手に対する特性認識などの対人要因も考慮に入れると，より正確に対人葛藤場面での行動や認識を理解できるであろう。

さらに，子どもの対人葛藤研究は，仲間との葛藤，親との葛藤，きょうだいの葛藤といった３つの分野に大きく分けることができ，各分野に多くの研究が行われてきたが，その間の相互影響はまだわかっていない。また，子どもの葛藤解決方略や社会的目標における発達上の差異を示す情報は少ない。よって，子どもの仲間葛藤での行動・認知が，親の養育態度，家族配置，道徳意識の獲得，民族文化からどう影響を受けているかを調べることは意味があると思われる。すなわち，子どもの仲間との対人葛藤場面における行動・認知を家庭，文化の大きなシステムの中において捉え，さらに，発達とともにどう変化するのかを明らかにするような縦断的研究が望まれる。

【引用文献】

Cillessen, A. H. N., & Bellmore, A. D. (2002). Social skills and interpersonal perceptions in early and middle childhood. In Smith, P. K., & Hart, C. H. (Eds.), *Childhood social development* (pp.355-374). Edinburgh: Blackwell Publishing Ltd.

浅川潔司・飯田香代子・永野留美子．（1990）．幼児の分配行動と社会的葛藤：三人遊び場面における分析．*日本発達心理学会第一回大会発表論文集*．

朝生あけみ・木下芳子・斉藤こずえ．（1986）．４歳児における「けんか」の原因と終結．*日本教育心理学会第28回総会発表論文集*，96-97.

朝生あけみ・荻野美佐子・斉藤こずえ．（1988）．０～１歳児クラスにおける子ども同士のいざこざ．*日本教育心理学会第30回総会発表論文集*，290-291.

Bakeman, R., & Brownlee, J. R. (1982). Social rule governing object conflicts in toddlers and preschoolers. In Rubin, K. H., & Ross, H. S. (Eds.) *Peer relationships and social skills in childhood* (pp.99-111). New York: Springer-Verlag.

Brenner, J., & Mueller, E. (1982). Shared meaning in boy toddlers' peer relations. *Child Development*, **53**, 380-391.

Bronson, W. C. (1975). Developments in behavior with age mates during the second year of life. In M. Lewis & L. A. Rosenblum (Eds.), Friendship and peer relations (pp.131-152). New York: Wiley.

Coser, L. A. (1956). *The functions of social conflicts*. New York: The Free Press.

Chung, T., & Asher, S. R. (1996). Children's goals and strategies in peer conflict situations. *Merrill-Palmer Quarterly*, **42**, 125-147.

Dodge, K. A. (1986). A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.), *The Minnesota symposia on child psychology* (pp.77-125). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Dunn, J., & Slomkowski, C. (1992). Conflict and the development of social understanding. In C. U. Shantz & W. W. Hartup (Eds.), *Conflict in child and adolescent development*. New York: Cambridge University Press.

Eisenberg, A. R., & Garvey, C. (1981). Children's use of verbal strategies in resolving conflicts. *Discourse Processes*, **4**, 149-170.

Emmons, R. A. (1996). Striving and feeling: Personal goals and subjective well-being. In P. M. Gollwitzer & J. A. Bargh(Eds.), *The psychology of action*. New York: Guilford Press (p.314).

Erdley, C. A., & Asher, S. R. (1996). Children's social goals and self-efficacy perceptions as influences on their responses to ambiguous provocation. *Child Development*, **67**, 1329-1344.

藤森立男．（1989）．日常生活におけるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究．*社会心理学研究*，**4**，108-116.

深田博巳．（1998）．*インターパーソナル・コミュニケーション：対人コミュニケーションの心理学*（p. 190）．京都：北大路書房．

Genishi, C., & DiPaolo, M. (1982). Learning through argument in a preschool. In L. C. Wilkinson (Ed.), *Communicating in the classroom* (pp.49-68). New York: Academic Press.

Hartup, W. W., Laursen, B., Stewart, M. I.,& Eastenson, A. (1988). Conflict and the friendship relations of young children. *Child development*, **59**, 1590-1600.

本郷一夫・玉井真理子・杉山弘子．（1992）．保育者からみた子ども同士のトラブルの実態と対応(1)．*日本教育心理学会第34総会発表論文集*，82.

本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子．（1989）．保育所における乳幼児のトラブルについて(1)：物の所有と使用をめぐるトラブルを中心に．*日本教育心理学会第31総会発表論文集*，143.

Katz, L. F., Kramer, L., & Gottman, J. M. (1992). Conflict and emotions in marital, sibling, and peer relationships. In C. U. Shantz & W. W. Hartup (Eds.), *Conflict in child and adolescent development*. New York: Cambridge University Press

木下芳子・朝生あけみ・斉藤こずえ．（1986）．幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達：３歳児におけるいざこざの発生と解決．*埼玉大学教育学部紀要（教育科学）*，**35**，1-15.

小林　真．（1998）．*幼児の社会的行動における主張性と協調性の役割*（p.21）．東京：風間書房．

子安増生・鈴木亜由美．（2002）．幼児の社会的問題解決能力と心の理論の発達．*京都大学大学院教育学研究科紀要*，**48**，63-83.

倉持清美．（1992）．幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ：いざこざで使用される方略と子ども同士の関係．*発達心理学研究*，**3**，1-8.

Miller, P. M., Danaher, D. L., & Forbes, D. (1986). Sex-related strategies for coping with interpersonal conflict in children aged five and seven. *Developmental Psychology*, **22**, 534-548.

Murphy, B. C., & Eisenberg. N. (2002). An integrative examination of peer conflict: Children's reported goals, emotions, and behaviors. *Social Development*, **11**, 534-557.

無藤　隆．（1992）．子どもたちはいかに仲間か否かを区別するか．*科学朝日*，**617**，18-23.

中川美和・山崎　晃．（2003）．対人葛藤場面における幼児の介入行動の変化：問題解決方略との関連．*幼年教育研究年報*，**25**，27-34.

中川美和・山崎　晃．（2004）．対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連．*教育心理学研究*，**52**，159-169.

Piaget, J. (1966). *Judgment and reasoning in the child*. London: Routledge & Kegan Paul.

Renshaw, P. D., & Asher, S. R. (1983). Children's goals and strategies for social interactions. *Merrill-Palmer Quarterly*, **29**, 353-374.

Rose, A. J., & Asher, S. R. (1999). Children's goals and strategies in response to conflicts within a friendship. *Developmental Psychology*, **35**, 69-79.

Shantz, C. U. (1987). Conflicts between children. *Child Development*, **58**, 283-305.

Shantz, C. U., & Hobart, C. J. (1989). Social conflict and development: Peer and siblings. In T. J. Berndt & G. W. Ladd(Eds.), *Peer relationships in child development*. New York: Wiley.

Shantz, C. U., & Shantz, D. W. (1985). Conflict between children: Social cognitive and socio-metric correlates. In M. W. Berkowitz (Ed.), *Peer conflict and psychological growth: New directions for child development* (pp.3-21). San Francisco: Jossey Bass.

山本愛子．（1995a）．幼児の自己調整能力に関する発達の研究：幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について．*教育心理学研究*，**43**，42-51.

山本愛子．（1995b）．幼児の自己主張と対人関係：対人葛藤場面における仲間との親密性及び既知性．*心理学研究*，**66**，205-212.

山本愛子．（1996）．遊び集団内における幼児の対人葛藤と対人関係に関する研究：対人葛藤発生原因及び解決方略と子ども同士の関係．*幼年教育研究年報*，**18**，77-85.

山本愛子．（1999）．対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題方略に関する発達的研究．*教育心理学研究*，**47**，451-461.

（指導教員　湯澤正通）